

## 会員によるポスター発表要旨

### 1. 「論理に着目した談話構成指導—文章指導のあり方を考える—」

板屋登子（創価大学大学院生）

初級を一通り終えた日本語学習者が何か文章を書いた場合、文法や語彙の誤用がなくとも、まとまりがない文章、もしくはワンパターンの文章になってしまうことが多い。このことに対し、さまざまな指導法が提示されているが、効果的な文章指導とはなっていないのが現状ではないだろうか。そこで、中級日本語学習者に一貫性・結束性がある文章を書かせるために、論理性に着目した談話構成指導に関する一案を示したい。

### 2. 「中国における日本語教育としての古典学習—八級試験対応—」

菊地真（北京理工大学）

中国では日本語教育の一環として古典学習が学部 3 年生のカリキュラムに組み込まれている。学部生の日本語能力検定試験として高等院校日語専業八級試験という全国規模の公的検定試験があるが、その「総合問題」90 問中 5 問が古典題である。この古典題の分析を通じて、中国当局の目指す古典学習の具体的な姿を考察し、それに対応した学習方法としてどのようなプログラム・教材を開発すべきかについて調査し考察したところを報告する。

### 3. 「アカデミック・ジャパニーズ実践報告のデータベース化に向けて」

木下謙朗（龍谷大学）・大島弥生（東京海洋大学）・小笠恵美子（昭和音楽大学）・佐藤正則（山野美容芸術短期大学）・伊藤奈津美（早稲田大学）・武一美（早稲田大学）・三代純平（武蔵野美術大学）

近年、アカデミック・ジャパニーズ実践は L2 に限らず L1 の初年次・リメディアル教育や高大連携の隣接分野に広がっており、その実践報告も盛んになってきている。そこで、AJ 実践報告 100 編を対象に内容分析を行い、それぞれの実践報告の特徴となるキーワードをタグ付けし、キーワード検索ができるようにデータベース化した。本発表では、データベース化した経緯と簡単なデモを行う。

### 4. 「高校生を対象とした小論文講演・講座—アカデミックライティング指導との接点を求めて—」

平川敬介（フリー）

本発表は、高校生（主に日本人）を対象に、AJG 研究会での学びを採り入れながら実践してきた小論文講演・講座についての報告である。導入期（1 学年）から入試直前期（3 学年）にいたる講演・講座の概要と課題を紹介し、上級学校におけるアカデミックライティング指導との接点を探り、今後の指導に生かしたい。

## 5. 「論理的に書く力を育成する指導法の検討—小学生を対象とした思考ツールの活用事例—」

前川桂美（枚方市立菅原小学校）・三宅貴久子（東京学芸大学）・高橋薫（早稲田大学）

本研究では、第3学年の児童を対象に論理的な文章を書く力を育成するために、自分の考えを筋道立てるための「型」を習得させる指導法として、思考の構造化を促すピラミッドチャートを使用することの効果について検討する。実践の結果、ツールを活用することで児童は事実—まとめ—主張の型に即して文章を産出できることがわかった。以上のことから、ピラミッドチャートを使用することは論理的文章の作成指導に一定の効果があることがわかった。

## 6. 「文章表現クラスにおける全体レビューの効果—ピアレビューと比較して—」

山口恵子（桜美林大学）・鈴木秀明（目白大学）

文章表現の指導では様々な段階でピアレビューが取り入れられているが、十分に機能しなかったという経験をした教師もいるのではないだろうか。構成面ではレビュー用のチェックシートの活用で一定の効果が出るものの、内容面では発展的な意見は出にくく難しいと感じることが多い。本発表では、自立途上の学習者に対しては、学生の作文を活用した全体レビューを行うことで全員参加の意見交換もでき、それぞれの気づきも大きいという実践報告を行う。

## 7. 「電子書籍による読書活動推進」

脇田里子（同志社大学）

近年、読書離れが叫ばれて久しいが、学部留学生も例外ではない。本発表では読書活動を推進する方法のひとつとして電子書籍の有効性を示す。印刷書籍と「楽天 Kobo」、「Kindle」、「eBook Library」の3つの電子書籍を比較し、それぞれの電子書籍の特徴を分析した。その結果、PC、スマホ、タブレットなどの多様な機器で読め、ネット辞書と連動した機能をもつ「Kindle」が最も有効と判断し、授業で「Kindle」版のテキストを使用した。読書活動推進の観点から、電子書籍利用における利点と課題を述べる。